

何気なく住んできた四絡の昔を知る、郷土に愛着心を深め、ふるさとの歴史を次世代につなぐ「四絡の昔を知ろう」
矢野町 吾郷弘司さんに地質学の観点から四絡の歴史を紹介していただきます。

『四絡の昔を知ろう』(その3)

前回、出雲平野の形成については、斐伊川や神戸川のはたらきによることに触れたが、今少し詳しく述べてみたいと思う。

- 1、7000年前（縄文時代） 最終氷河期が終了し、地球の温暖化により海水面が上昇し、島根半島と中国山地の間が水没。（縄文の海進と言われる）
- 2、5000年前（縄文時代） 斐伊川、神戸川からの土砂の流入し古宍道湖の中央部が埋まり、東西2つの水域に分かれた。西部分は神門水海となる。神門水海には斐伊川や神戸川が流入した。
- 3、4000年前（縄文時代） 三瓶山の大噴火により神戸川下流域に大量の土砂が堆積。
- 4、2400年前（弥生時代） この時代に水位の低下（弥生海退と言われる）や三瓶山の噴火による土砂堆積の影響で、神門水海が狭まる。
- 5、1200年前（奈良時代） 日本海の水位が上がり、神門水海が広がる。
- 6、350年前（江戸時代） 大洪水が発生し、斐伊川の本流が宍道湖に流れを変えた。その後、斐伊川の改修（川違えと言われる）が図られ、今の広大な斐川平野が形成された。
- 7、130年前（明治時代） より広大な平野を目指した改修がくりひろげられた。

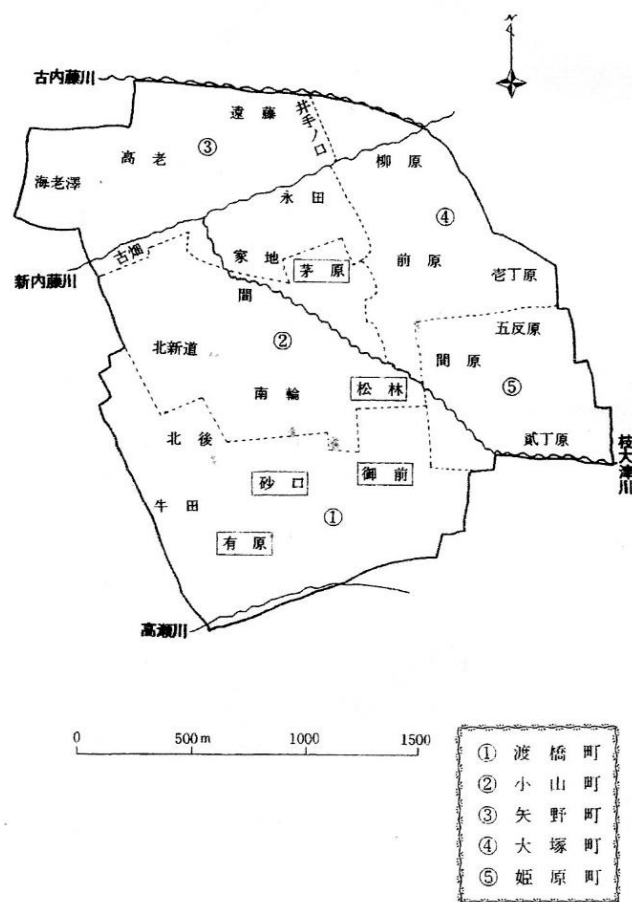
③四絡地域の成り立ち

その2でも触れたように、当地区は神門水海に面した場所にあり、斐伊川と神戸川の影響を大きく受けた地域であると考えられる。出雲国風土記にも「肥沃な土地」「百姓のうるおいの園」「多くの魚」等の言葉が並び、極めて人の生活に適した場所であったと考えられる。

また、出雲国風土記には斐伊川沿いにある郷として「河内郷」「出雲郷」「神戸郷」「伊努郷」「杵築郷」「塩治郷」「八野郷」が示され、わたしたちの住む四絡地区は「八野郷」の部分である。先にふれたように、八野＝矢野ではなく、八野＝四絡と理解した方が正しい（？）かもしれない。

右に示す図は古い四絡地区の地名地図であり、その中には海老澤（えびざわ）など、水産物を連想させる地名もあり、地名を辿るのもまた楽しいものである。

※次回は四絡の遺跡にふれてみたい。



(文責 吾郷弘司)